鉄砲組百人隊の由来

天正18年(1590)、徳川家康が関東に入国した際、 江戸西郊の警護のため、家臣の内藤清成に四谷辺 りに屋敷を与えました。このとき内藤氏の配下と なったのが伊賀組又は二十五騎組と称した後の鉄 砲組百人隊でした。そして、関ヶ原の合戦後の慶 長7年(1602)、関東奉行となった内藤清成に与 力25騎、同心100人が預けられ、組として成立 しました。百人隊は百人組とも言われ、与力20騎、



同心 100 人が甲賀組、根来組、青山組、大久保組に配属されましたが、大久保組だけが与力 25 騎でした。慶長 7年、内藤清成が預かっている組の者に住居もなく、生活に困っていると訴えたところ、大久保一帯に屋敷を与えられ、寛永 11年 (1634)、久世三四郎が大久保組の組頭となった際、間口が狭く奥行が長い屋敷を分割しました。そして 3本の道を設け、道に沿って南町、仲町、北町として東西に木戸を構えました。道に面して家屋を構え、裏側は自家用の畑となりました。ほぼ現在の百人町一丁目、二丁目、三丁目にあたります。

鉄砲組百人隊の業務

鉄砲組百人隊は、平時には江戸城大手三之御門御番所(百人番所)、箱番所、同心番所の警護を行いました。 この際、百人番所には与力 8,9 人と同心 4,5 人、箱番所には与力 2 人と同心 4,5 人、同心番所には与力 2,3 人が一昼夜勤務し、百人組 4 組が輪番で警備しました。1 カ月で 4,5 日の勤務となります。

臨時の業務には将軍参詣の警護、将軍の鹿狩り時の勢子があげられます。将軍が上野寛永寺、芝増上寺に行く際には寛永寺の文殊楼、増上寺の山門で警護をし、そのときには各組の幕を張って鉄砲 100 挺を飾り、与力と同心が並んだそうです。

天保 14 年 (1843) の将軍日光参詣の際には、当時の大久保組組頭花房志摩守道久以下、与力、同心の全員が参加し、道中及び参詣時の警護を行いました。この警護は2ヶ月以上前から警備、行列の稽古を行い、具足、武器類は幕府から支給されて、鉄砲組4組が交互に警護しました。2組は将軍と共に行列に加わり、2組は沿道の警護を行っています。これらの業務は鉄砲組百人隊が将軍・幕府直属の組である特徴と考えられます。

鉄砲組百人隊の廃止

大久保組の氏神であった諏訪神社に奉納されている文政 4 年 (1821) の奉納額には「外記流」と書かれ、大 久保組の多くの者は幕府鉄砲方・井上外記の流派であることがわかります。しかし、幕末になると次第に洋 式砲術の習得が必要となってきました。安政 3 年 (1856) には築地に講武所が開設され、その前年には幕府か ら旗本御家人に対し、洋式砲術の習得が命じられました。大久保組の者も講武所で銃隊調練をしています。 その後、文久 2 年 (1862)12 月、幕府の軍制改革に伴い百人隊は廃止され、組頭、同心、全ての者が講武所付 きとなり、与力は騎兵組、同心は大砲組・歩兵隊となり、幕末の長州征伐にも加わった者も存在しました。

大久保つつじの誕生

江戸時代、園芸植物を栽培することが流行し、大久保では鉄砲組百人隊の同心たちが家計の足しにするためつつじを栽培しました。幸い土地が適していたこともあり、江戸時代中期以降(文化・文政期(1804~1830))つつじの名所として有名になりました。なかでも同心の飯島武右衛門宅には、北側一面につつじが植えられ、樹の高さも低いもので約 90 cm、高いものでは 3m、成木だけで数千本あり、東西約 15m、南北約200m の間、両側はすべてつつじだけが植えられていました。これが話題になり、大名の奥方から庶民までつつじを見るために多くの人が集まりました。百人町では飯島宅だけではなく、多くの屋敷でつつじが見られ、町全体がつつじの里の趣だったそうです。当時江戸でつつじの植木を売り歩く者、縁日に出す者は、大久保のつつじを扱う者が最も多かったとされていました。

明治期以降の大久保つつじー大久保つつじの最盛期ー

明治維新以降、大久保組の同心によりつつじは栽培されていましたが、明治6年(1873)、東京府知事(楠本)より「つつじは大久保の名産であり、各家で見るより、一つの場所に集め、これを産業として昔の景観を取り戻すべき」と提案され、地元の有志が発起人となり、近隣の家々からつつじを集めて、明治16年(1883)におよそ7千坪のつつじ園を開設しました。その後、明治20年(1887)頃、百人町南町に「南つつじ園」が開園し、この他にも、「日の出霧島」を作り出したことで有名な日の出園、高さ6m、周囲15m、樹齢200年の「八重霧島」大つつじを所有していた萬華園、久留米藩士が植えた老木で有名だった筑紫園、300年以上の古木で知られた中村園等のつつじ園が開園していました。最盛期にはつつじ見物のために臨時列車が運行されたほどです。当時は花の種類が70種、株数も1万株に及び、八重霧島等の奇種、珍種もこの頃栽培されました。当時、最も多く植えられていたのは千本霧島(本霧島)で、重要視されていたのはこの地で生まれた日の出霧島でした。

大久保つつじの新たな展開と終焉

明治末から大正期の大久保つつじは海外へ輸出されるようになり、新たな展開を迎えました。アメリカ、ヨーロッパではクリスマス、イースターの贈答品としてつつじの鉢植えが流行し、日の出霧島(輸出額の過半を占める)をはじめ、数々の品種の 5,6 年から 7,8 年ものが輸出されました。特に、早咲きにする

ため温室栽培に適するものを選びました。当時輸出を手掛けていた横浜の商社では、 英語版のパンフレットを作成して販売促進を行いました。大久保では萬花園が輸 出を手がけ、アメリカ向けに毎年5~7万本の挿し木を行ったそうです。

しかし、大正元年(1912)にアメリカが輸出入植物防疫体制を強化し、 大正3年(1914)に輸出入植物取締法が日本で制定されたことで、つつじの 輸出は大きな打撃を受けました。さらに急速な地域の宅地化進展と地価高騰 により、借地が多かったつつじ園は経営が困難になり、「南つつじ園」のつつ じは日比谷公園に移植して閉園、大正4年(1915)には、館林の杉本千代氏が萬 花園のつつじを購入する等、大久保にあったつつじ園はすべて閉園し、つつじは各地

に移植されました。現在では館林つつじヶ丘公園、日比谷公園、三河屋旅館(箱根)、小金井市浴恩館にもと もと百人町にあったつつじが見られます。

いったん終焉した大久保つつじですが、近年では地域の小学生や住民がその復活に力を尽くしています。